

日本外科学会雑誌より年代をおって胸部外科に関する題名を選び出して我国の第二次大戦前までのものを年表にのせた(87頁参照)。胸部外科の戦後の様子は前にのせてある諸先生のお話しの中にもあるので終戦後胸部外科学会創立までの経過は除外した。

その前に我国の外科の歴史や発展の一端を佐藤清一郎先生のお話ししてみるのも興味深い(元東京医専教授, 昭和40年5月17日死亡, 胸部外科2巻2号昭24年)。

さてわが国外科の歴史を今さらにここに喋々するもおかしいが, ここに一顧を投じると, 明治初年に海外旅行免状第1号をもってドイツに渡り, ベルリン大学を卒業したのは佐藤進氏(私の祖父)で, ちょうどその時起った普佛戦争に加わり, 軍陣外科を実地見学して明治8年帰朝した。

その新智識をもって順天堂において一般医師を教育し, 西南戦争, 伏見会津の役, さらに日清・日露の役に, 軍医総監として純洋式外科をもって戦傷者の治療に当たった。

その後大森治豊氏が九州で無腐手術を高唱して縦横の手腕をふるい, 多数の内臓外科例を発表して, 佐藤氏とともに本邦初期の二大外科医と謳われたのは人のよく知るところである。

外科において, かかる偉人がでたにもかかわらず, 胸部外科・脳外科ともになんら特筆すべき進歩を見ずに数十年を経過したのである。これはしかし実に世界的の傾向であって, あながち日本ばかりを責めるわけには参らぬのである。

ドイツにおいては, すでに1858年 Freund が肺結核に対し, 第一肋軟骨の切除を強調したのが最初といわれているが, 彼れは肺結核の原因として上部胸廓の狭窄(軟骨の短小および化骨)に主点を置いたのに反し, Kaufmann の教室の佳田, 岩崎, 佐藤(私)はこれに対抗して, 肺結核の発生機序について幾多の研究をやった。

これが今から36~37年前のことで, 当時岩崎小四郎君は兎の上胸部に針金を巻いて狭窄を起さしめ, ゲッティング大学の五階の屋根の上で結核菌をプウプウゴム球で動物に吹きかけて苦心をしていたことを覚えている。私は動物の肋軟骨を移植して狭窄を起さしめて, 同様の試験を繰返しなどした。斜角筋切断術を創案したのはこの頃である。

その後ベルリンにでて, 永井秀太君を勧誘し, 大学の結核研究所に通学して, 人工気胸の臨床と動物実験を習得して日々永井君と虚脱療法を議論したものである。帰朝後は永井君が人工気胸を唱道し, 仙台の熊谷博士とともに大いにその普及に努めたが, 世間一般は歓迎せず一時下火となった。これは大正4~5年の頃である。

私は当時, 気胸術よりは胸廓成形術に精進したが, 患者の数が少く, 孤軍奮闘の気味で嫌気がさし, 肺壞疽手術の方へ転向したのである。この方が手術がむずかしいだけに興味も深く, 一般には少い病気とされた肺壞疽も, 約500人以上を治療して空洞切開に苦心すること約20年を数えた。

結核の方はその後, 次第に勃興し来り, 石川, 土井, 武田, 榊原の諸氏が臨床例を発表し, 他方動物試験では以前から河村, 茂木, 金谷の諸氏が種々努力されたものである。

宿題報告としては, 尾見, 石川氏の外, 小沢氏の肺切除, 石山氏の肺虚脱, 佐藤, 篠井の肺壞疽ならびに気管支造影法等が特筆されるべきものであった(この造影法はハワイにおける汎太平洋外科学会において好評を博し, その写真は懇望されてスタンフォード大学レ線科に寄贈した)。

このほか食道外科の大沢, 瀬尾, 中山氏, 心臓外科の榊原, 小沢氏等それぞれ有益なる研究を発表され, そのほか鳥瀉氏の平圧開胸説も学界を大いに賑わした。

かかるうちに昭和11年, 都築氏は佐藤とともに日本代表としてハワイにおいて講演をなし, さらにアメリカ本土を視察して帰朝してコロロス氏成形術を実施し, 結核外科の沈滞に対し注射を施した観があり, 各地結核療養所, 傷痍軍人療養所を中心とする若手外科医の奮起があつて, 加納, 宮

本、会田、高橋の諸氏の報告となり、昭和22年の宿題において、海老名、鈴木、武田、加納、卜部氏等が努力の結果を披露され、終戦後の活躍ぶりも目覚ましいものがあった。このほか河合、青柳、内田、沢崎の諸氏もそれぞれ貴重なる研究を発表された。

この年表をみると我国の胸部外科の発表は日清戦争より始まったことになる。これをみると昭和12年頃までは肺疾患のすべてのものに手がつけられている。また膿胸、輸液など現代医学と内容は同じようである。心臓外科の実験的報告は昭和12年頃より、肺結核の外科は昭和13年頃より開始された。これらの中で特に興味ある個所を引用したい、その一つは平圧開胸か陰圧開胸かの問題について京大鳥瀉教授が第39回日本外科学会会長をせられた時、九大後藤教授との問答である。

追加2 (59, 岩崎氏ニ対シ)

長崎医大第二外科 辻村 秀夫

余ハサキニ第31回外科学会ニ於テ平圧開胸術ニヨル横隔膜「ヘルニア」ノ手術例ヲ報告セリ。今次再ビ他ノ例ヲ経験シ之ヲ追加ス。

26歳、男子ニシテ胃底ガ食道ノ後ヲ廻リテ左胸腔ヘ脊柱ノ右ニ沿ヒ出デコレヲ包ム囊ハ胸膜、「ヘルニア」内容ト強キ癒着ヲナセリ。開腹術ニヨリテハ処置シガタキヲ知り、後平圧開胸術ニヨリテ漸ク剝離還納シ「ヘルニア」門ノ処置ヲナシ得タリ。

尚之ノ例ハ比較的稀ナリトセラル、真性「ヘルニア」ナリキ。

会長「私ハ会長ノ地位ヲ離レテ會員トシテ聊カ述ベサセテ頂キマス。

昨年ノ本会ニ於テ、平圧開胸トイフコトニ関シテ、大阪ノ小沢教授ガ鳥瀉ノ説ニ全幅的ニ賛成スルト言ハレタノニ対シ、後藤教授ガ起立発言サレテ、之ハ鳥瀉ガ創メタノデハナイ、佛国ノ外科学者が既ニヤッテ居ル。文献ヲ知ラナケレバ借シテヤルト小沢氏ニ言ハレタ。ソレデ私ガ先ヅ其ノ文献ヲ拝借シマシタ。之ハ Pierre Duval 著、R. Grègoire et A. Courcoux 著及ヒ Moynihan 著ノ三部デ、何レモ1917年ニ出タ小冊子デアリマス。Duval ノ論文ハ1922年5月ノ Presse médicale ニモ載ツテ居リ、自分ハ知ッテ居リ、1925年ノ教室ノ論文中ニモ掲ゲデアリマス。今度拝借シタ書物ニモ、其ノ84頁ニ於テ、次ノ記載ガアリマス。“Ces methodes (過圧装置モ陰圧装置モ) sont physiquement rationnelles……併シ bien peu pratiques” トアリマス。即チ過圧装置デモ減圧装置デモ、合理的デアルガ、戦場ナドデハ不便デ实用価値ハ少イト申シテ居ルノデアリマシテ、「異圧装置、殊ニ過圧装置ヲ行ッテハナラス、ソレハ有害デアル」トイフ主張ハシテオラスノデアリマス。他ノ二冊ノ文献ニ至リテハ一向ツマラスモノデアリス。

私共ハ佛国外科ガ言フガ如ク「過圧ハ合理的デアルガ、実用上不便デアルノデ、過圧ガ無クテモ開胸出来ル」ト言フノデハナイ。我々ハ「過圧装置ハ無用有害デアル、カカル有害ナモノハ使ツテハイケナイ」ト主張シテ居ルノデアリマシテ、此ノ主張ハ世界中京大外科以外ニハ何処ニモ無イノデアリマス。此間ノ差別ヲ辨ヘナイデ、佛国デハ京大外科以前ニ既ニ異圧装置無クシテ開胸シテ居ルカラ京大外科ノ主張ハ佛国学派ノ後塵ヲ拝スルモノデアルカノ如ク述ベタ後藤教授ノ論述ハ当ラナイノデアリマス。

当時佐藤清一郎教授ガ発言シテ、「過圧ナシデ自分モ以前ニ手術ヲヤツタ」ト述ベテ、京大ノ主張以前ニ平圧開胸ヲ行ツタトノ意味ヲ附加サレマシタガ併シコレハ平圧開胸術デハナイ。

之レハ「過圧装置ハ無効且ツ有害デアル」ト言ウ京大外科ノ如キ主張ヤ自覚ガアツテヤツタノデハナイ。即チ決シテ「平圧開胸術ヲ行ツタ」ト申スベキモノデハナイ。佐藤教授ハ1925年ノ本会席上デモ同様ノコトヲ述ベラレマシタ。其ノ当時ハ Sauerbruch ノ過圧装置ガ世界ヲ風靡シテキタ時代デアリマスカラ、モシモ佐藤教授ガ今日京大外科ノ主張スルガ如ク「過圧開胸ハ無用ニシテ且ツ有害ナリ」トイフ学術的信念カラ、其ノ当時既ニ過圧無シテ開胸シタト申サレルナラバ、当時ニ於

テ其ノ主張ヲ学会ニ発表スベキデアリマス。併シ其ノ如キ発表ハアリマセン。即、佐藤教授ノ行ツタノハ何等學術の主張ガアツテノコトデハ無クシテ、申サバ無意識のニ偶然行ツタト申ス迄ノコトデアリマス。佐藤教授ノハ「自分モ林檎ノ落チルノヲ見タ」ト言フノト同ジデアリマス。京大外科ノ如キ學術の主張アリテノコトデハアリマセン。

後藤教授ニオ願ヒスルノハ、京大外科ニ於ケル平圧開胸術ノ主張ハ佛国其他ノ如クニ「平圧デモ開胸ガ出来ル」ト申スノデハ無クシテ、「過圧は無用デ且ツ有害デアル、平圧デナケレバナラス」ト主張スル次第デアツテ、此ノ主張ハ世界中京大外科ダケデアツテ、ソレ以外ニハ何国ノ学者モソノ様ナ主張ヲシテ居ラスト言フコトヲ認識シテ頂キタイノデアリマス。」

後藤教授「私ハ昨年ノ本会ニ於テハ平圧開胸術ガ数千例ニ於テ大戦當時ニ行ハレタルコトニツキ文献ヲ紹介シタノデアリマス。而シテ1917年ノ Pierre Duval 氏ノ著書ノ中ニハ結論トシテ「……一言以テ之ヲ言ヘバ一般外科手技ガ肺ニモソノママ、完全ニ行ハレルモノデアル……」ト申シテ居マス。又1918年発行セラレタル Abstracts of war surgery ニ於テハ次ノ通りノ結論ガ肺ノ外科ニツキテ書イテアリマス。

「……Among other things, it has been shown, that the fear of pneumothorax during operation is unfounded and that without any particular danger, one may perform a large thoracotomy or eventrate the lung, lobe by lobe, just as one does loops of intestines, palpate, incise, resect and then replace it in the thorax. The lung is not redoubtable organ that it was before the war……」トアリマシテ肺ノ手術ニ当リ特別ノ装置ヤ手技ハ要セスト言フ結論ニナツテ居リマス。

之ヲ歴史的ニ調べテ見マスレバ佛学派ハ古クヨリ主トシテ平圧開胸ヲ主張シテ両側ノ平圧開胸ヲ行フモ必ズシモ常ニ死亡スルモノデハナイコトモ記載サレテ居マス。独逸学派ハ気圧差異装置ヲ使用スルコトヲ主張シテ居リマス。

鳥瀉教授ノ教室ヨリ発表セラレタル先年ノ業績ニツキテハ當時何等異論ヲ申セシコトナク之ヲ承認シテ居マス。本邦ニ於テハ主トシテ独逸学派ノ文献ガ読マレテ居マスカラ余ハ佛国方面ノ平圧開胸ノ文献ヲ紹介セン次第デアリマス。」

会長「只今ノお話シニ対シテ私ハ申シマスガ、京大外科ノ主張ハ「平圧開胸デモデキル」トイフノデハナクシテ「平圧開胸デナケレバナラス、過圧開胸ハ有害デアル」トイフノデアリマス。此点（日佛主張ノ相違）ヲオ認め下サイマスカ？」

後藤教授（低声デ）

「認めマス。」

会長（大イニ意気込シテ）「有難フ。」（拍手）

後藤教授「平圧ノ方が良イト言フコトハ、独逸デモ認めテ居リマス。亜米利加デモ亦タ認めテ居リマス。過圧ガ悪イト言フコトハ鳥瀉教授教室カラノ論文ヲ観テカラニシマス。」

会長「平圧開胸ノ方が良イトイッテイルト言フダケデハ足ラナイノデアツテ、過圧装置ガイケナイ（不可）ト主張シテキルノデアル。其ノ点ニ就テ……」

モウツ疑問トスル処ハ昨年ノ本会デ、「軍医学校デ異圧装置ナシニ犬ノ肺切除ヲ行ッタ」ト述べラレマシタガ、ドウシテ犬ヲ使ハレマシタカ」

後藤教授（エッ……）（聞き返ス）

会長（質問ヲ繰リ返ス）

後藤教授「犬ハ Mediastinum ガ弱クテ手術ガ一番ムツカシイ。兎デハ Mediastinum ノ強サハ人ト犬ノ間位デアル、私ハ独逸学派ノ学問ヲシテキタノデ学生諸君ニ Demonstration ノ意味デヤッタ

ノデアリマス。」

会長「犬デヤラレタノハソウユウ意味ナラバ分リマスガ、若イ士官達ニ見セルニハ、犬ヲ選ンダト言フコトハ賛成出来マセン。後デ伺ッタ所ニ依ルト、確カ其ノ犬ハ10日位デ出血デ死ンダサウデアリマスガ、犬デハ中々成績ハ得ラレマセン。平圧開胸デヤルノハ犬デハ不適當デアリマス。ソレハ犬ハ縦隔竇ガ弱イ許リデナク、時ニハ左右ノ胸腔ガ交通シテイル様ナモノガアリマス。過圧装置無シノ実験ニ犬ハ全ク良クナイノデアリマスガ、只今述ベラレタ様ナ御積リデアレバ良ク分リマシタ。」

独逸学派デハ従来主トシテ犬ニ依ル実験結果ニ従ッタ關係上異圧装置ガ必要ナリトノ主張ニナッテ居ツタモノデアリマス。兎トカモウ少シ大キケレバ牛トカヲ実験ニ使ッテ居ツタナラバ過圧装置ヲ主張セズニスンダモノト考ヘラレマス。犬トカ馬トカハ此種ノ実験ニハ避クベキ筋ノモノデアリマス、私ハ昨年ノ学会デ後藤教授ノ申サレタ時ノ其ノ当時ノ感想ヲ只今述ベタダケデアリマス。」

後藤教授「私が軍医学校ニテ犬ヲ実験動物トシテ肺切除ノ手術ヲ行フコトガ必ズシモ適當ナラザルコトハ承知シテ居マスガ、人ノ材料ヲ得ルコトガ出来ナカッタノデアリマスカラ学生ソノ他ニ示ス為メニ犬ヲ用ヒテヤリマシタ。」

大正8年私ガ九州大学ニ赴任シテ間モナク胸部ノ開放性切創ノ患者ガ入院シマシタガ、当時余等ハ平圧ノ下ニ処置シテ之ヲ縫合閉鎖シマシタ経験ガアリマス。之ハ珍シイ事実デモナイノデ発表モシテ居リマセン、独逸学派ガ新シイコトノ様ニ言ッテ居ルガ、既ニ沢山ヤラレテ居ルト言フコトヲ言ッタダケデアリマス。京大外科カラノ発表モ詳シク読ンデ知ッテ居ルノデアリマシテ、私ハソウ申シ込ンダ筈デスガ、ドウデスカ？」（拍手）（会場騒然）

会長（只今ノオ話デハ京大外科カラノ発表ヲ既ニ精読サレヨク知ッテ居ルトノコトデアリマスガ、シカシ先刻ノオ話デハ「過圧装置有害」ノ主張ヲシテ居ルカ否カノ点ヲ認メルコトニ関シテハ京大外科教室カラノ論文ヲ読ンダ上デ返答ヲスルトノコトデアリマスガ、何レガ真実デアリマスカ「過圧装置ガ不可ナイ」ト京大外科ガ主張シテ居ルノデアルトイフコトヲ承認サレマスカ？」

後藤教授「実験的研究ハ認メマス。」

会長（再び）「「過圧装置ガ不可ナイ」ト主張シテキルノデアルト言フコトヲオ認メニナリマスカ？」

後藤教授（小声デ）「其レハ認メマス。」

会長（意気込ンデ）「有難フ」（更ニ語ヲ次ギ、会衆ニ向ヒ）

「諸君！ 過圧装置ハ独乙ノ年来ノ主張デアリマシテ、Sauerbruch モ生存シテオル今日一朝一夕デソレヲ放棄スルトハ考ヘラレマセンガ、早晚歴史ニナルモノデ、必ズ平圧開胸術ノ時代ガ来ル筈ノモノデアリマス。私ガ Thürich デ Sauerbruch ノ手術ヲ見タノガ1913年デアリマシタガ、手術中ニハ過圧装置ヲ傍ニ置イテアルダケデ、ソレヲ使ッテ居ナカッタ。私ハ此ノ有様ヲ視テ之ハ妙ナコトデアルト考ヘマシタ。当時ハマダ「インチキ」ト言フ言葉ヲ知りマセンデシタガ、コレハ實際「インチキ」ナノデアリマス。過圧ハ唯ダ最後ノ胸壁縫合ノ時ニダケ使用シテ胸腔内空氣ヲ膨脹肺ヲカリテ排除シタノミデアリマシタ。ソレデ歸学後研究ヲ進メテ今日デハ「過圧ハ無用ナルノミナラズ却ッテ有害ナリ」トノ結論ニ到達シタノデアリマス。京大外科以外世界中何処ノ国デモ斯ノ如キ主張ハシテ居ヌノデアリマスカラ、京大外科カラ提供シタ「平圧開胸術」トイフ術語ハ「過圧ハ無用ナルノミニ止ラズシテ却ッテ有害ナリ」トイフコトガ京大外科ノ主張デアルコトヲ認メタ上デ使用シテ頂キタイノデアリマス。」

（此ノ演説中後藤教授降壇自席ヘ歸ル、会場騒然）

会長（着席）「他ニ御発言，御座イマセンケレバ60番」

（此ノ時会場後方坐席ヨリ「会長」，「会長」ト呼ブ声アリ。会場騒然タルタメ会長ニ聞エヌ様子ナリ。会長取り上ゲズ。更ニ「会長発言ヲ許セ」「勝手ナコトばかり言ッテ駄目ヂャナイカ」，「佐藤ニ言ハセロ」，「佐藤先生シッカリ頼ミマス」等叫ブモノアリ。

佐藤教授（自席ニ起立）

「佐藤デスガ。」

会長「ア，佐藤サンデスカ，良く見エマセンデ失礼シマシタ，ドウゾ此処へオ出デ下サイ。」

（佐藤教授登壇）

佐藤教授「私ハ態々此処ニ上ッテオ喋リスル筈ハ無イノデアリマスガ。タマタマ私ノ名ガ出タ以上，又タ唯今ハ何ダカ興奮サレテ面倒ノ様（会長ノ方ヲチラツト見ル）ニ見エマシタノデ，時間が切迫シテ居ルコトデアリマスガ，演壇デ喋言ラシテ頂キマス。私ハ独乙ノ過圧開胸ヲヒイキシテ日本ノ鳥瀉サンニ反対スルト言フノデアリマセン。私ハ一昨日ノ講演デ Pneumotomie ノコトヲ話シマシタ。肺ノ手術モ色々アリマスガ私ハ切開ヲヤッタノデアリマス。此ノ時癒著ヲ突嗟ノ間ニ作ルタメニ工夫シナケレバナリマセン。其ノ時ニハ肺ヲウマク捕ヘテ胸壁ニ縫ヒ付ケレバ良イノデアリマスガ，空気が肋膜腔ニ入り肺ガ萎縮スルト縫合出来ナイコトガアリマス。ソレデ私ハ幸ニ装置ガアツタカラ，過圧ニ依リ肺ヲ膨脹サセテ置クト操作ガ仕易イ，此ノ際ニモ機械ガアルカラ使ッタマデデ，過圧ヲ用ヒテ手術後ニ大シタ害モ認メナカッタ。過圧装置モアル場合ニハ便利ナコトモアル。

会長「ソノ他ニ御発言，ゴザイマセンケレバ60番。」